



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	技術の倫理への問い：実践から理論的基盤の探求へ〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	金光, 秀和
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第6994号
Issue Date	2016-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62462
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hidekazu_Kanemitsu_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 金 光 秀 和

	主査	教授	藏	田	伸	雄
審査委員	副査	准教授	田	口	茂	
	副査	准教授	宮	嶋	俊	一

学位論文題名

技術の倫理への問いー実践から倫理的基盤の探究へー

本論文は今世紀に入った頃から日本でも導入が始まり、広がりを見せている技術の倫理について、主に哲学的観点から国内外での実践の動向と研究状況を広くかつ緻密に精査した上で、どのようなアプローチが適切なのかを検討したものである。本論文は既存の「技術の倫理」の主要な各アプローチについて詳細に分析した上で、それぞれの問題点を簡潔に指摘し、その欠落を補うアプローチとして「技術的媒介に基づく技術の倫理」という方法論の有効性を示している。従来の技術の倫理の研究の多くが、個別の方法論に基づくものでしかなかったのに対して、本論文では既存の各方法論を包括的に比較分析した上で、それらの長所と限界とを簡潔にまとめている。各アプローチの問題点として、例えば「公衆に対する責任」アプローチ(第3章)ではその実行可能性の点で問題があり、さらに「行為者中心的アプローチ」(第4章)では技術の問題が技術者個人の問題に還元され、技術のあり方について十分に問題にされることがない。金光氏はこのように技術者倫理の既存の各方法論の問題点を示し、さらに科学技術社会論の研究成果の検討を踏まえた上で、「技術の哲学」について問う必要性があることを示している。こうして金光氏は既存の「技術者倫理」とは異なる、技術の哲学に基づく「技術の倫理」の可能性を示し、結論としてフェルバークの「技術的媒介」の哲学に基づく技術の倫理という方法が有効であるとする。本審査委員会は、このような金光氏の詳細なサーベイと緻密な分析に基づく主張には十分な説得力があると判断した。

現在工科系大学に勤務し、技術者倫理教育に携わっている金光氏は、すでに日本の技術者倫理・技術哲学の領域でのリーダーの一人である。本論文はその金光氏の研究成果をまとめたものであり、まだ生成途上にある技術の倫理・技術の哲学における、今後の研究の指標となるものである。技術者倫理についてはすでに哲学者・応用倫理学者や工科系教員、技術者らによって導入と展開がなされており、現在では教育においてかなりの広がりを見せている。しかし関連する日本語文献の多くは教科書的なものであり、専門的な研究は決して多くはない。そのような状況において技術者倫理(さらには技術の倫理)についての国内外の研究動向を広く精査し、その内容を的確にまとめている点で本論文の学術的・資料的価値は極めて高い。さらに本論文の意義は、そのような技術者倫理の批判的検討をもとに、技術的媒介に基づく技術の倫理というアプローチの有効性を示したことにある。本論文は今後日本において哲学的な「技術の倫理」について研究を進める上で、参照されるべき基本文献となるであろう。

しかし、本論文に問題がないわけではない。本論文ではフェルバークを用いた技術哲学の方法論の有効性について示されているものの、具体的にどのようなアプローチをとることが有益なのかについては、さほど展開されてはいない。この点について金光氏の論述は慎重である。また結論部で技術に関する超越論的考察の必要性が述べられてはいるものの、本論文ではそれについても述べられてはいない。しかし以上の点については口頭試問の際に金光氏による応答があり、審査委員会はその応答は十分なものであると判断した。またこれらの問題点は上で述べた本論文の成果に比べれば大きな問題ではなく、今後金光氏がご自身の研究を進める中で解消されるものと思われる。以上の審査結果に基づき、本論文審査委員会は全員一致で本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと判断した。